



【討論】

国際基督教大学日本語教育課程 課程准教授
小澤 伊久美 氏

○丸山 続けて小澤先生、よろしくお願いいたします。

○小澤 すみません、ちょっときょうは話をしにくいので立たせていただきます。

【スライド⑤-1】冒頭、丸山先生からお話があったように、開発型評価に発想を転換したというあたりについて、それを一緒にやっているという立場からコメントをお願いしますというお話だったので、そこに絞りたいと思います。去年までの2年間に、プログラム評価に取り組んでみて、いわゆる、割と内向きの、私たちはこういうものがいいと思うけれども、どうしようかみたいところでやってきたんですが、そうすると、それは大学に届かない。つまり大学の思っているものと違う場合に、勝手に評価しても相手には届かないだろうということがあって、やってみて、自分たちには意味があるけど、これを届ける声にはならないねというので悶々としていたところに、去年、実用性を考えたときに、まず評価の前に土台づくりが必要だということを長尾先生の講演で伺って、ああ確かにそうだと。

そのときに、さっき山口先生がちらっとおっしゃっていたのですが、評価に耐えなければいけないというお話がありましたけれども、それは自分の声を届けられて、一緒にこういう評価をしましょうということで、納得をされていて評価をされれば受け入れられるのですが、自分たちとは全然関係のないところで評価基準がつくられて、勝手に押しつけられたら、やっぱり声を上げたくなるんだと思うんですね。

そこでまず、そういう関係を、土台をつくるのが重要ということで、確かにそうだ。センターを取り巻く環境は今本当に流動的で、内向きに評価しようと

思ったときでも、かなりいろいろな要素が、今決めたことと、来年ではすごく違う、あるいは1カ月ですごく変わるという状況があって、センターの運営だけを考えても、今までのような線的な形で基準を決めてやっていくのではうまくいかないんじゃないかということがあって、その両方の目的から、開発型評価というのをやっていったらどうか。去年までやってきたことも、別にむだなことではなくて、開発型評価をやっているというふうにとらえればいいんじゃないですか、そういうものですよというお話があって、ああそうかというふうになったんですね。【スライド⑤-2】

開発型評価とは何かという話なんですが、Developmental Evaluation というのがもともとと言語なんですけれども、Michael Quinn Patton という先生がおっしゃっているのですが、ちょっとここのところははしりますけれども【スライド⑤-3】、複雑な環境、状況がある中で、その中でプログラムが発展しようとしていくときに、形成的な評価とか、インパクト評価とか、あるいは総括的评价というようなことは、理想的なモデルがこうある。じゃあそれに対してあなたは今どの段階にあるかということをして形成評価したり、総括評価をしたりするものなんです。複雑な環境では理想的なモデルそのものが、まずまだない。でもプログラムは発展していかなければならない。そのときにデータを取って分析をして、評価を役立てるということは十分可能であって、そのような評価のやり方を開発型評価と名づけるという枠組みなんです。

そういうふうに言われてみると、今のこのセンターの状況に非常に合うのでいいんじゃないかと。開発型評価という手法があるというよりは、開発型評価はほかの評価と目的とかアウトカムが違うというふうに理解するといいと Patton の本にはあります。私がすごくわかりやすかったのは、料理のお話なんです。メタファーが書いてあって、例えば、レストランで何か料理をつくると思ったときに、コックさんがあるレシピに沿ってつくろうと思ったときに、レシピどおりにできているかということを見ていくようなものは形成評価で、料理ができ上がったときに、食べたお客さんが、ああおいしかったというのが総括評価、それに対して、開発評価でもしやるとしたら、まずきょうはどんな人たちが集まるんだろう、どんな食材が手に入るんだろう、きょうはどういう状況のパーティーなんだろうということを考えながら、じゃあこんな料理がいいね、あんなふうに出そうねというふうに考えるときに、1つ1つそれでもデータが必要ですね。こん

なおお客さんが来ると。そういうふうにはデータを取って、食材を選んで、料理を考えてつくっていく。そのときに、使えるデータの取り方、分析の仕方などが開発型評価のメタファーとしていいんじゃないかというのが書いてあって、ああ、それはすごくわかるなと思ったんですね。【スライド⑤-4】

だからといってセンターが開発評価をしている中で、形成的評価とか総括的評価をしないわけではなく、こういうもので形成的評価をするのがいいということが合意できれば、もちろんすばいと思いますし、総括的評価が役に立つ。何を総括的評価の基準とするかということ、評価実施側、結果を受け入れる側が合意していれば、それはそれで実施すばいんだと思うんです。例えば、さっき池田先生のお話にもあった、日本語力が学習者は向上したかとか、学習者のニーズに corres pond しているプログラムをつくっているかというようなことは、合意ができていれば、十分やっていいことだし、やっていることだと思うんですね。そんなことを考えると、開発型評価の中でも、いろいろな個別の小さな評価の目的とか実施の活用方法に応じて、さまざまな手法を使うということであって、別に私たちは、これを否定して今、プロジェクトをしているわけではありません。【スライド⑤-5】

この1年間、開発型評価という枠組みを用いて、センターで評価のプロジェクトを進行してきたのですが、結果をどういうふうを活用した運営をしたらいいかということを見ると、データを活用して、プログラムの運営を見直していったり、進めていったりすることをしてきていますし、それからそれを通じて、センターの所員の皆さんが、評価のスキルを向上する、今も継続していると思うのですが、それを目的としている。それから評価結果を使って、他部署との交渉をうまく進めようということをしてきているようです。そういうことを見ますと、信頼関係を、部署を超えてつくることに評価を役立ててきていると思いますし、それから関係の構築も、こういう話す場をつくること1つとっても、去年と今年では随分状況が改善されていると思いますし、それで大学国際化への貢献を評価する土台づくりが着々と進んでいるように、外部の者としては見ています。【スライド⑤-6】

その上でのコメントが3つあります。1つ目ですが、準備をしてきたというのがこの1年間なんです、じゃあそもそもの目的だった、大学の国際化にセンターが貢献しているということを測る土壌は十分整ったのかなということを、

ちょっとこの後、伺えればなと思いました。あるいはこの方法で築くことができそうかというような予見でもいいかと思います。整った場合に、誰がどういうふうに実施するのかとか、センター関係者がそこにどう関わるかというところが一番、去年のことを考えると気になるので、そのあたり、お話を伺えるといいなと思いました。【スライド⑤-7】

2 番目は、やってみて非常にセンターの運営に役立つ評価だったように思うんですが、そうすると、目的を達成した、つまり大学の国際化が評価できたら終わりではなくて、年間の事業の中に入れて、ずっと継続していくのはどうなのかなというのを外部にいる者としては今思っています。もしそれをそうすると、評価を実施する人の負担というのをちょっと考えておかないといけないのかなと思うので、そのあたり、いろいろ工夫しているように外部にいる者としても見ているので、お話しただけだと、来場者の皆さんに参考になるかなと思いました。

【スライド⑤-8】

3 番目ですが、私は今、外部評価者として関わっているのですが、内部評価者というのを育てていくという観点も重要なんじゃないかなと思いました。いつまでも外部者が来てやっていくものでもないですし、現実、今もう、私が来て評価をしているというよりは、アドバイスをしたり、話を聞いたりする中で、内部の方々がご自分たちでデータを取ってやっている部分が非常に大きい。それを育てていくというのを意識してやっていくといいんじゃないかということと、そうなった場合に外部評価者はどういう役割で関わるのが望ましいと、今やっていらっしゃる皆さんとしては思っているのかなというのを思います。個人的には外部の人が入ることで、先ほど田丸先生のお話にもあったように、信頼性とか、客観性とかというのは担保されるところはあるかなと思いました。【スライド⑤-9】

以上、3つのことを思いましたというコメントです。【スライド⑤-10】（拍手）
○丸山 ありがとうございます。続けて長尾先生よろしく願いいたします。

【スライド⑤-1】

大学の国際化と日本語教育における
プログラム評価
ー過去・現在・未来ー
コメンテーター 小澤伊久美（国際基督教大学日本語教育課程）

【スライド⑤-2】

開発型評価への発想の転換

■ 評価結果の活用性は

これまでの取組を「開発型評価」
という枠組みで位置づけし直し、
今後も継続していこう

■ センサー

流動的

大学国際化への貢献についてインパクト
評価を実施するのは今は難しい

評価の設計を関係
者がきちんと話せ
る場の構築

【スライド⑤-3】

開発型評価とは

“Developmental Evaluation”

by Michael Quinn Patton

事業、プロジェクト、スタッフおよび
(あるいは)組織の開発などを支援する
目的で実施する評価のプロセスのことで、
発展的な意図に基づき評価に関連する質
問をしたり、評価論理を適用することを
含む(パットン2001)

【スライド⑤-4】

開発型評価とは

複雑な環境において発展しつつあるプ
ログラムに対して、形成的評価・イン
パクト評価など、理想的なモデルに対
してプログラムの現状や成果がどのよ
うであるか評価する枠組みは向かない。

「開発型評価」の目的とアウトカム
プログラムの“development”（開発／発展）を促すこと

【スライド⑤-5】

形成的評価・総括的評価も実施

- 評価結果が活用される環境が整っている場合には、形成的評価も総括的評価も必要に応じて実施すべき

- ❖ 例) 学習者の日本語力が向上したか
- ❖ 学習者のニーズに答えているか

評価の目的と結果の活用法に応じて
様々な評価手法を用いることが大事

【スライド⑤-6】

開発型評価によってセンターは

- 評価結果を活用した運営
- 評価のスキルの向上
- 評価結果を用いた他部署との交渉

信頼獲得、関係構築など、大学国際化
への貢献を評価する上での土台作り

【スライド⑤-7】

コメント1

- 大学の国際化への貢献をはかる評価を実施する状況は整ってきたか。（この方法で整いそうか。）
- 整った場合、誰（どのような部署）が評価を実施するのか。センター関係者はどのような立場で入ることができそうか。

【スライド⑤-8】

コメント2

- 開発型評価は今のセンターの運営に役立つように思うので、今のように年間のセンターの事業の一部として組み込んで実施を継続してはどうか。
- 評価実施者の負担を考え「その時に必要なことに重点を置き、小さいことでもいいので実施する」はうまくいっているか。

【スライド⑤-9】

コメント3

■ 内部評価者

- ❖ 評価者を内部で育てていく体制があるといいのではないか。

■ 外部評価者

- ❖ 客観性と信頼性が担保されるのではないかな。

【スライド⑤-10】

コメントのまとめ

1. コメント1：大学国際化への貢献の評価は実施可能になりつつあるか？
2. コメント2：開発型評価は今後も年間事業に組み込み続けるといいのでは？
3. コメント3：内部評価者の育成をする？
外部評価者の関わりはどのように？